文化財だより

第 16 号

平成15年 3 月

発行　真鶴町教育委員会

特集 真鶴町石造物悉皆調査報告

「歴史再発見」

湯本　満

作業のあらまし

「石造物」はひと口にいえば「石でつくられたもの」ですが、ここでは石仏・石碑・顕彰碑・記念碑など、墓石をのぞく各種の造形物をさします。

古くから石の産地であったこの地域には多くの石造物が今に残されています。どのくらいの種類数量にのぼるでしょうか、平成九年から四年計画で悉皆調査を行いました。そして十三・十四年にそのまとめをしました。

悉皆調査で全町域をあたるのですから、住民や事業者の方々の協力を得ながらの作業でした。

手がけた件数は真鶴地区一九八、岩地区一八七、計三八五を上回りますが、めんどうなのは件数の多さのせいだけではありません。

石仏に例をとりますと、掲図のように一体ごと縦横の寸法を計測し、銘文（名号・願文・記年・施主等）を判読して写し取り、所在を白地図に印し、詳図や解説を付記するなどの手数を踏みます。そしてその整理に調査後一、二年を要しました。

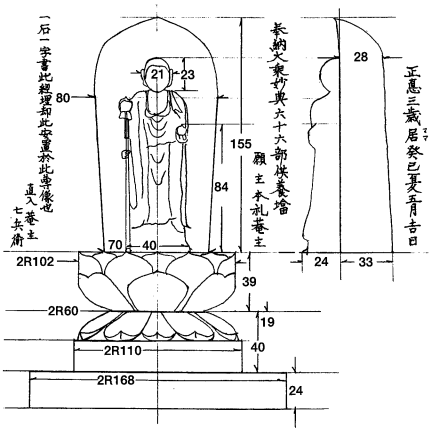
郷土史を補完するもの

このような調査にどういう意義があるのでしょうか。それは、ただ対象物件をリストアップするだけでは、単なる羅列にすぎませんが、そうした石造物の建立年代・所在範囲・建立者・創立由来・時代背景などを読み解き、それらを分析・総合することによって、郷土の民俗・信仰・生活史の側面を知ることができるからです。

私は『真鶴町史』編纂（平成九年了）にたずさわった一員として、同書が事情で地域の民俗・信仰についての編述を割愛せざるを得なかったことを残念に思っておりましただけに、今次調査が地域史を補完する記録となることを大変うれしく思います。

石造物の分類

産石地真鶴の豊富な物件の所在は、まさに石造物に見る地域の歴史・文



目次

特集真鶴町石造物悉皆調査報告
「歴史再発見」……1
文化財審議委員長　湯本　満
「三角山墓地の石造物と刻された人物」……2
文化財審議委員　川口　仁齊
「碑石小松石が語る庶民信仰」……4
文化財審議委員　小野間　松男
「世界に羽ばたく小松石」……6
文化財審議委員　川ノ邉　昭治
「京都・奈良石造物調査の報告」……7
文化財審議委員　櫻井　武
平成十四年度文化財保護事業……8

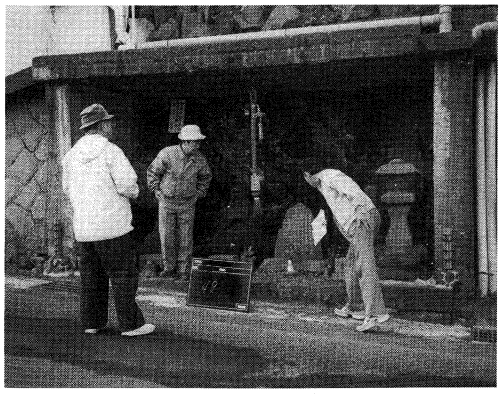
化資料といえ、全容の公開は後日にまつとして、本号ではそのうち特徴的なものが解説されていますが、大別して次のように分類できます。

(1)**近世代にかかわるもの**—西国大名や徳川氏御三家と関係あるもの、江戸築城用石（残石）その他（詞碑・由来碑・顕彰碑等）

(2)**寺社関係**—貴船神社・瀧門寺ほか各寺院に存置されるもの、寺社講・浄土信仰に関するもの

(3)**地域民の造建・寄進物**—朝倉清兵衛・鈴木五兵衛・土屋惣七・五味伊兵衛ほか大勢による

(4)**土俗信仰に関するもの**—道祖神・野仏・道標・庚申祠（塚）



石造物調査の様子

(5)**近・現代作物**—戦争・災害・築港関係碑・文学碑・催事モニュメント

＊

石造物の一般分類規定では、墓石類は含めないことになっていますが、中には史的価値のあるものもあり、一、二紹介しておきます。

田広家先祖墓　尻掛海岸にある田広家の先祖墓には、江戸初期紀州からこの地に来住した初代与次兵衛の業績が刻まれています。

与次兵衛は、尻掛浦を鰮（ぼら）網漁の拠点として開発し、関東における網漁に先鞭をつけるとともに、真鶴を近世相模湾漁業の中心的地位に高め、地元に多くの恩恵をもたらしました。こうした業績は、古文書（田広家文書）にも残されていますが、墓石が地域産業（漁業）の由来を物語るというのも、この地らしい特色といえましょう。

中島家の算盤墓　瀧門寺内に算盤（そろばん）の形を彫り込んだ珍しい墓標があります。

弘化二年七月没・眉算盤花禅定門という戒名、水入れの「中島」という家名から、故人が幕末期の和算師匠中島花山であると知れます。

また瀧門寺寺録に、享保年中（一七一六～）寺住満立和尚代、法弟子と筆子らが共に算学を学ぶとあり、江戸中期以来同寺に寺子屋式の塾が開かれていたことがわかります。

寺院（僧侶）は、江戸時代以来檀家を含めた庶民教育の指導的立場にありました。西相地方で他の郷村、城下町にくらべ瀧門寺の寺子屋開設期が格段に早いのは、一般の子女教育というよりも、地域特産の小松石を供給する石材業の確立にともなって、岩村では石場の設営、採石の計量、賃金・石値段の計算など、村役人や石工の生産活動上の必要からであったと考えられます。

歴史に光を当てる

このように石造物は、単なる石の造形としての観照対象にとどまらず、地域史の諸相を反映するものであり、それは文献記録とは違った資料価値を有するもので、今回の調査はその面に光を当てようとするものです。

三角山墓地の石造物と刻された人物

川口仁齊

平成九年度より進められて来た真鶴町石造物悉皆調査により、岩地区東北部の三角山墓地と呼ばれる場所にある石造物についても現状の把握が行われました。

そこには、大正十二年横浜の住人であった渡部昌吉が建てたと言われる無縁塔を中心として、四体の如来座像と六体の地蔵菩薩石像が安置されています。

朝倉清兵衛寄進如来像

筆者の父（明治三十九年生）より聞いたところによるとこれらの石造物は、古くから現在岩小学校が建てられている付近にあった斎場の中に

まつられていたものが、開発により真鶴町の旧ごみ焼却場のあった付近に移転され、その後第二次大戦の後に現在の三角山に移転しなおしたものであると言われています。

無縁塔を中心としてまつられている四体の石像を地域の人達は「四天王」などと呼んでいる人もあったように記憶しておりますが、頭部の螺髪や衣、さらに定印の様子などから如来の像であることがわかります。それならばどのような如来であり、何の目的でだれが安置したものでしょうか。現在まつられている四体の石像のなかで、西側に位置する石像の背面には

施主　朝倉清兵衛
天和癸(みずのと)八月吉辰（一六八三）

とあるところから施主朝倉清兵衛により作られた石仏なのであろうと推測できます。

朝倉清兵衛について筆者は詳しく調査していないので正確には理解していませんが東伊豆の大室山山頂に五智如来の石座像がまつられています。これは、相州岩村の地頭朝倉清兵衛の娘が身ごもり、大室山浅間神社に祈願したところ、無事安産であったので奉安したと伝えられています。ここで言う朝倉清兵衛が同一人物であるとすれば、三角山の像はもともと五体あった五智如来であり、移転を重ねる際に一体紛失してしまったのか、あるいは五智如来として制作されたが、時同じくして作られたものではなく四体作られて終わってしまったものなのかは現在は不明であります。

小田原市入田の長興山紹太寺にある供養塔には、長興山の開発に従事した相州岩村の石工朝倉清兵衛の名が刻まれています。さらに小田原藩稲葉氏の記録である「永代日記」には天和二年（一八六二）仙台より江戸まで、南部米の輸送を請負った岩村の朝倉清兵衛が、航海の途中で遭難し、蝦夷地に漂着したとの記述がみられます。

両手で托鉢椀を持つ地蔵
瀧門寺12世功外の銘あり

左手錫杖、右手宝珠を持つ地蔵　施主英山

岩村朝倉清兵衛という記述や、天和二年から三年という時代的に接近していることなどから、朝倉清兵衛はいずれも同一人物であろうと思われます。さらに伊豆から小田原、遠くは東北地方にまで手広く仕事をしており、石材の採掘・加工だけでなく海運業もあわせ営むかなりの実力者であった人物と推察できます。

北側のすみに安置されている六体の舟形光背僧形立像は、それぞれの持ち物や手の形から六地蔵菩薩の像と思えます。六地蔵菩薩の様式は様々ありこの石像が創建当時のままの順に並べられているとは限りませんが、六地蔵立像の脇にはそれぞれ

延宝四辰年十二月
古施主駿河屋小左衛門
古施主次良□門　（□は不明）
古施主心岳惟空
（元禄元年天王社の寄進している人物と同一か）
享保十四年己酉(つちのとり)八月吉辰
功外叟代
右施主英山和尚

などの文字が読み取れます。これらのことからこの地蔵像は元禄から享保にかけて制作されたものと思われます。

功外叟とは宝暦九年十月（一七五九年）に没した功外満立のことで、瀧門寺十二代の住職を勤めており、秀偉な僧であったと伝えられています。瀧門寺の末寺であった如来寺の校割帳(こうかつちょう)（財産目録）を作成したり、瀧門寺の整備に力をつくした人物でありました。

六地蔵は天上、人間、阿修羅、餓鬼、畜生、地獄の六道に輪廻する、すべての修生に救いの手をさしのべるとされており、寺の門前や斎場の入り口あるいは集落の外れの辻などにまつられていることが多いのです。

この六地蔵はもともとあったと伝えられる場所が、現在の瀧門寺の境内地に隣接していることや、瀧門寺門前の遠藤氏宅を大上（おおかみ）と呼んでそれ以上うえに人家や集落が無かったと伝えられることから施主英山と記された人物は瀧門寺八世の住職を勤め、天和二年十月（一六八二）に没した英山長雄であろうと思われます。

さらに、旧施主宗清旧損乃故などの文言も見られるところから、この石像が建てられる以前から六地蔵の石像があったが、破損したため瀧門寺の住職たちが関わって再建した物であるとも考えられます。

これらの石像がなぜどのようにして作られ、なぜ移転されていったのかを尋ねて見ることは、岩村の古い時代から近代にいたる歴史の再発見につながる貴重なヒントとなると思われます。

碑石小松石が語る 庶民信仰

小野間 松男

真鶴・岩の江戸時代初期からの、庶民信仰を物語る名号碑などが、石造物悉皆調査で確認されました。

これらの塔碑を眺めますと、「南無阿弥陀仏」の名号碑が中心となりますが、種別・設置場所・年代などをまとめますと

一、名号碑

(1) 真鶴西部（大道 西側）

1	名号道標	元禄七年（一六九四） 御守杢兵衛 荒井坂三叉路
2	名号道標	年代不詳（熱海道三叉路） 五味 衛貞 駅前ロータリー
3	名号供養碑	天明四年（一七八四） 田広家 尻掛坂

(2) 真鶴東部（大道東側・駅裏）

1	名号供養碑	寛永十二年（一六三五） 肥前国松浦郡横田村住人 発心一本松墓地
2	講中名号碑	寛文七年（一六六七） 法名二十一名 連記 西念寺門前
3	名号萬霊等	文化八年（一八一一） 露木八右衛門・もん 西念寺門前
4	徳本上人名号碑	文化十年（一八一三） 発心寺 田中源四郎 口明石墓地 参道
5	名号墓碑	弘化五年（一八四八） 観幽 中橋家 西念寺門前

(3) 岩地区

1	名号供養碑	寛永十一年（一六三五） 森田四六兵ヘ墓碑施主不詳 先祖畑
2	欠損名号碑	寛永欠（一六三?） 施主等不詳 先祖畑
3	名号萬霊等	寛永十七年（一六四〇） 如来寺洞窟前
4	徳本上人名号碑	文政二年（一八一九） 世話人 土屋惣七等 如来寺洞窟前
5	名号石工先祖碑	安政六年（一八五九） 遊行正統五十六主他阿 先祖畑
6	名号道標	文久三年（一八六三） 施主不詳 三角山墓地

二、浄土教関連石碑

1	大日如来台座石	正保二年（一六四五） 岩村 鈴木徳兵衛 如来寺洞窟前
2	蓮社号記入覚仏碑	正保三年（一六四六） 正蓮社覚誉 如来寺洞窟前
3	浮彫り釈迦如来像	慶安五年（一六五三） 露木半兵衛 西念寺門前
4	五智如来極楽東門	慶安五年（一六五三） 露木半兵衛 発心寺 口明石墓地 参道
	大正十一・十二年（九二一～一三） 発心墓地・西念寺移転	

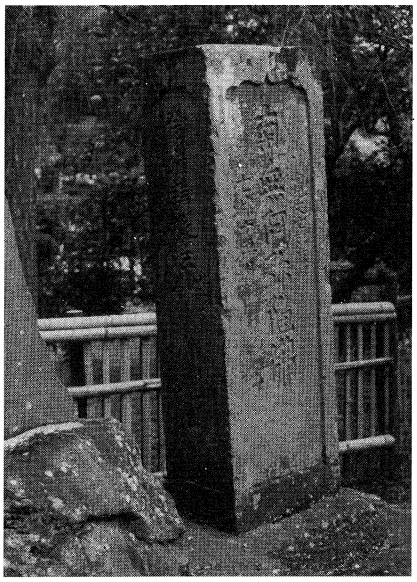
三、如来寺洞窟十王等石仏群

・十王像十一体（閻魔像二体）
・俱生神二体　・奪衣婆像一体
・善悪人頭杖　・業の秤
・地蔵菩薩像二体
・大日如来像　・菩薩形像（聖観音像）
・如意輪観音像二体
・観音菩薩立像　・釈迦如来像
制作年代　寛永以降不詳
作仏聖・土地の石工の制作

如来寺洞窟（極楽）大日如来と菩薩形座像

となります。

真鶴町に残された念仏講碑の全てが「南無阿弥陀仏」の名号碑で六斉念仏、寒・夏念仏などの碑は一つも見られません。「板子一枚下は地獄」の漁師、廻船業者。切立つ山肌に丈夫な蔓で編んだ「もっこ」に乗り宙吊り状態で採石した石工。危険と隣合せの人々にとっては、毎日が祈りの日だったのでしょうか。



西念寺　念仏講中碑

名号碑を設置場所別に見ますと、浄土系寺院に置かれた講中碑、萬霊等名号碑と熱海道と真鶴・岩とを結ぶ三又路などに置かれた道標名号碑とに分けられます。また、真鶴の歴史的な発展経過から考えますと、江戸築城と係わった西国大名家臣の名号碑。弾誓・但唱・林貞と続く浄土系木食聖、作仏聖の石造物。高僧・上人の筆跡となる名号、徳本上人、遊行正統五十六主他阿の碑などを見ることが出来ます。

さて、浄土信仰を物語る石造物の特色や村人との係わりはと考えますと、先ず如来寺の洞窟前の碑と十王を初め地蔵・大日・菩薩形像などがあります。名号碑や覚仏碑・大日如来台座などからは如来寺の創建当時の様子を推測することが出来ます。また、洞窟の地獄極楽に置かれた石仏群を見ながら、岩明細帳と新編相模国風土記稿の「本尊弥陀石仏、但唱之作……」を思い出し、如来寺半鐘銘文を読みますと「……帰命山如来寺には、阿弥陀の石像が安置されており、村人たちは熱心に念仏を唱えています……略……念仏を唱えると、その声は寺堂にあふれ……」とありますので、村人が「百万遍大数珠」を手に熱心に称名したことが分かります。

西念寺の門前には、京都蓮華寺に但唱上人の石像を作成した作仏聖林貞の「浮彫り釈迦如来像」（施主露木半兵衛與宜）と二十一名の法名を刻んだ寛文七年の講中名号碑があります。風土記稿によれば、西念寺は浄土宗総本寺知恩院系の小田原山王原心光寺の末寺で、本尊は阿弥陀如来となっています。慶安五年に露木半兵衛が本尊と異なって釈迦如来像を奉建されたことは当時この寺の二尊信仰的な流れを感じさせられます。また、寛文七年の念仏講碑の二十一名の法名は檀徒の仏事修行者が考えられ檀徒講中を思わせます。

また、発心寺口明石参道にあります同じく露木半兵衛造立、但唱の弟子林貞作の「極楽東門」からは、極楽往生願う人々が、春秋彼岸の中日にこの、門前で日没の太陽に向って念仏を称え、西方浄土の阿弥陀仏を観想する日想観の修行が行われたと思います。

仏光山発心寺は、由来記によりますと「ここに頗（かたか）く一山一宇あり鎮西末派の精舎見生即無生の道場なり、……慈に弘治元乙卯（きのとう）暦（一五五五）鎌倉の天照山光明院の念譽貞巌和尚来たり……同年中秋に仏閣を建立、庫裏を建造す……」あり、風土記稿には小田原大蓮寺末とあります。

極楽東門と徳本名号碑

大蓮寺の慶長時代の住持と思われる鏡譽以天につきましては、「麓の里の小田原に鏡譽以天といえる有り。道心堅固にして、才智もありし人なめり。殊に上人敬て、日夜に登山怠りなく、信仰帰依の餘にや……」と「浄発願寺」（伊勢原一の沢）の縁起、弾誓上人絵詞伝の下巻に、箱根塔の峯阿弥陀寺の弾誓上人を敬ったことが書かれています。

真鶴・岩の念仏信仰は、西相模地域の弾誓・但唱・林貞と続く作仏聖の教えの中で育まれたと考えられます。それは江戸築城と係わった、真鶴・岩の採石・運搬・廻船や漁業に携わった人々の労働の安全祈願と死者への回向となり、村々の中で共に生き抜く連帯のエネルギーは、「道標名号碑」などとなって引き継がれて来たと考えられます。

世界に羽ばたく小松石

川邉昭治

世界近代彫刻シンポジウム碑

昭和・平成、現代真鶴の石碑・石造物は、真鶴西部(大道西側)に61基、真鶴東部(大道東側と駅裏)に18基、岩地区に29基あります。また、大まかな種類別で見ますと、①記念碑52、②文学碑10、③現代彫刻10、④灯籠その他の石造物36基となります。

それぞれの石碑・石造物にはその製作に色々な意味が考えられます。町政の重点施策を物語る真鶴・岩の両漁港の開港・水道開発などの記念碑。来鶴された文人墨客の文学碑。国指定無形民俗文化財「貴船神社の船まつり」など神社に係わる碑。真鶴の銘石「小松石」に係わる石碑・石造物などがあげられます。

昭和初期に町中あげて取り組んだ真鶴漁港の開港は、石碑「真鶴漁港築港記念碑文」により伺い知ることが出来ます。漁港の築港に対する町民の渇望がどの様に大きかったか。昭和二年から町政担当者が如何に苦労して国・県を動かしたか。そして昭和五年の着工にどう漕ぎつけたかなどと大掛りなチームワークと膨大な予算執行など町をあげての取組みも理解できると思います。

古老・先輩方のお話によれば「港湾事業の基礎工事、海岸通りの開削などには、大量の小松石が切出され、積みあげられ完成させた大工事だった」ということです。また、「戦前の子供達は、見事な石積みを眺めたり、腰を下ろしたりしながら釣りや泳ぎに興じ、石積みに馴れ親しんだ」とも語ってくれました。

その後、港内はもとより、海岸道路も再三の工事で修復され、現代的景観となり当時の面影が見られなくなりました。三メートル以上もある「築港記念碑」は、昭和初期の様子を物語る大切な「証」なのです。

次に日本を代表する銘石「小松石」を考えてみたいと思います。

「世界近代彫刻日本シンポジウム宣言」

彫刻はいずれの国、時代を問わず共同社会と自然と協同したとき偉大であった。

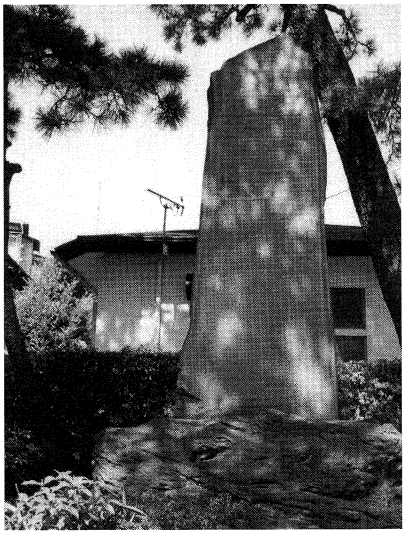
彫刻のこの祖型を自然の中で回復するために、我々は集まり製作することをここに宣言する

このシンポジウムに　会同せるわれら—

ヘルベルト・バウマン（ドイツ）
オルガスティン・カルデナス（キューバ）
モーリス・リブシ（フランス）
ロベール・クーチュリ（フランス）
アンドワーヌ・ポンセ（スイス）
カルロ・シニョーリ（イタリア）
本郷　新（日本）
木村賢太郎（日本）
毛利武士郎（日本）
水井康雄（日本）
野水　信（日本）
鈴木　実（日本）

厳粛にこの宣言に署名す

一九六三年七月一日
真鶴半島道無海岸にて
彫刻用材採石者　青木政一



築港記念碑

この文は、道無海岸に設置されています「世界近代彫刻シンポジウム」記念碑の「裏面文」です。

この碑から、昭和三十八年（一九六三）七月一日から九月三十日までの二か月間、この海岸でドイツのバウマンを初め六名の外国の近代彫刻家と六名の日本彫刻家が、小松石を相手に汗みどろの格闘を展開されたことが読みとれます。水井夫人も参加されましたが、国際的には認められず正式には記録されませんでした。

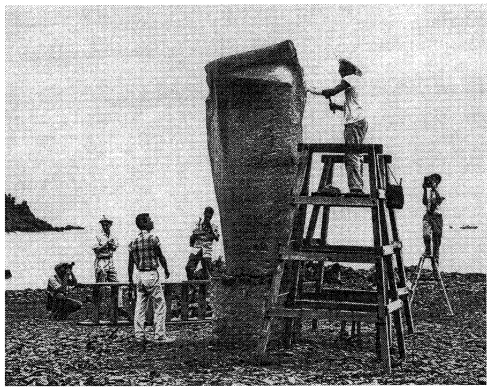
では、何故この真鶴の

地で「世界近代彫刻シンポジウム」が開催されたのでしょうか。

昭和三十九年、わが国においてオリンピックが開催されるに当り、日本の石造彫刻技法を世界に知らせようとする機運が芽生えました。政府も企画に賛同し計画をねりましたが、実現することが出来ませんでした。しかし、朝日新聞社はこの企画に賛同し実施の方向で検討されました。

一、石質、大きさ、石彫の陰影。
二、オリンピック会場に展示を目的とするため、運搬に便利な所。
三、用材が豊富であること。

等々の条件をクリヤーして、「真鶴の小松石が最高であるとの結論に達した」と言われています。銘石「小松石」の真価が世界に認められたわけです。


制作に余念のない彫刻家

参加されたフランス・ドイツを初め六か国の石彫は、当時手彫りの石彫国で「人間の心や魂は手彫りで表現する」の立場を取っていましたので機械彫りの国は参加しなかったと新聞は報じていたそうです。

彫刻中に光の及ぼす陰影を作者自身の立場から検討し、道無丁場で制作することになりました。「小松石」に魂を乗り移す現代彫刻家の心意気が道無海岸に充満したのです。

彫刻する石は、「十五トンから二十トン以上」もあります。私は、作業が始まる前から道無海岸へ知人と共に行き、再三にわたり石と取り組む外国人、日本人彫刻家の真剣な姿を見ました。真夏の太陽を背に汗と埃に塗みれ唯黙々と巨大な石に向って戦っているのです。炎暑の中時には青く透き通る海で泳ぐ姿も目にしました。

九月三十日完成をみた石彫作品は東京新宿御苑の庭園に陳列され、後に渋谷のオリンピック会場に展示され「小松石の彫刻」は世界中の人々の目に焼きつきました。

京都・奈良石造物調査報告

櫻井　武

文化財審議委員会では奈良・京都へ石造物の調査に訪れました。今回は二千年一月に奈良県明日香村で発見されて話題を呼んだ亀型石造物遺構と、京都府当尾地区にある石仏群の視察が主な目的でした。石造物と日本文化の繋がりについて見聞し、真鶴における文化財の保護と活用のヒントを探ってきました。

亀型石造物遺構

明日香村の亀型石造物とその付属施設は、女帝であった斉明天皇の時代に作られたものと推測されています。花崗岩を亀型に加工した水盤のようなもので、小判型の同様な石造物とともに、井戸から汲み上げた水を中に引き入れて流す、一種の導水施設でした。周囲は谷戸の一部を掘削し、敷石や石積を組んだ土木工事が施されていました。復元された遺構は、今で言えば子供達が水遊びをする親水公園のような風景でした。施設のすぐ上には急峻な斜面に石垣が積まれ、酒船石と呼ばれる謎の石造物も残されています。一見して強い印象を受ける施設ですが、これらが何のために作られたものかはまだよくわかっていません。

ただ、『日本書紀』に「狂心渠」として記された施設の一部ではないか、というのはほぼ間違いないようです。「『民を徒に使役し、運河を掘り、山から大量の石材を運び出して積み上げた。こんなものはすぐに壊れてしまうだろう』と人々はそしった」と書かれています。これは東北や朝鮮半島への相次ぐ出兵、幾多の王宮の建設など、多くの『興事』を好んで民の疲弊を省みなかった女帝を、後のひとが評したものです。

この時代は大化の改新の直前で、大きな転換点にありました。

この遺構の建設は、不安に揺れる人心を掌握するため、女帝自らが占いや祭事を執行した祭祀施設ではないか?と推測されています。

亀型石造物が作られた時代、明日香村は日本ではじめて継続的な都が置かれた場所となりました。

大規模な土木工事や村の中に残さ

れている多くの石造物は、このまちづくりに伴って作られたものではないかと思われます。これらを見て歩くと、日本の歴史の中で石造物が果たした役割の大きさを再認識させられます。

明日香村では現在、村全体を博物館とみなしたまちづくりが進められています。最新の設備を誇る多目的ミュージアム県立万葉文化館の開館。野外の文化財や遺跡を保存しながら、わかりやすく紹介する公園化事業も急ピッチで進められているようでした。また箱物を作るだけでなく、自転車の中学生が観光客に道を譲りながら挨拶をするなど、村全体でお客様をもてなすという心づかいが溢れていました。

明日香　亀型石造物遺跡

当尾の石仏群

奈良と京都の境にある丘陵地、京都府加茂町を中心とした地域を当尾と呼びます。ここは鎌倉時代以降に作られた多くの石仏が美しい山里の風景に点在し、野仏の里として有名です。国宝三重塔のある浄瑠璃寺、国重文阿弥陀如来坐像のある岩船寺という二つの美しい古刹のある地としても知られています。

鎌倉幕府を開いた源頼朝は、奈良東大寺大仏殿の復興に着手します。この事業を指揮した重源は中国南宋から多くの技術者を招きました。その中に伊氏と呼ばれた石工集団がおり、固い花崗岩を加工する技術を日本に伝えました。当尾はおそらく古い石材産地のひとつで、初期の石仏は伊氏によって彫られたものと伝えられています。石仏は当時の技術革新の粋を今に伝えています。

真鶴町内にある石工先祖碑は当地の石材業のはじまりを、平安時代末期に都の戦乱を避けて来鶴した土屋格衛なる人物によって開始され、幕府の開設に伴い鎌倉に石を運んだのが始まりだと伝えています。

幕府成立後の首都建設にともない、関西から伝えられた花崗岩を加工する技術を応用して、真鶴を含む伊豆沿岸地方の固い安山岩が利用できたのではないかと推測されています。石工先祖碑が語る西からの先祖の渡来は、こうした技術革新の伝播を物語っているのではないでしょうか。渡来人伊氏が当尾に残した野の仏は、どこかで真鶴石材業の歴史と繋がっているはずです。

山里の面影のある当尾は折から紅葉の季節で、山野は美しく彩られていました。豊かな椎の木の自然林と石仏や古刹の歴史的文化財とが調和し、京都府の歴史的自然環境保全地域に指定されています。ハイキングや自然観察などで人気が高く、住民による催し物の案内などもありました。同じく半島の森と石造物を持つ真鶴、学ぶべきところがたくさんありました。みなさんも機会があれば是非訪れてみて下さい。お寺の住職が「ここは、ゆっくりできるところですよ」と、にこやかに迎えてくれるはずです。

石仏の里当尾　笑い仏・弥陀三尊前で

平成十四年度文化財保護事業

◎文化財広報啓発事業
・文化財だより第十六号発行
・町民センター・民俗資料館展示事業
　各施設で年間六回の企画展示を実施
◎文化財審議委員調査研究事業
・町内の屋号調査
　真鶴地区を対象に昭和初期における屋号の調査を実施
・調査研究事業
　十一月十二日から十三日、京都及び奈良の石造物の研究視察。文化財の保存と活用について調査研究を実施
◎文化財審議委員協力事業
　教養講座『くすのきゼミ』に講師として協力
・「真鶴八詠を歩く」十一月九日
◎文化財保護事業
「真鶴の鳥」一部改訂・増刷三百冊